

「卑弥呼の布―下池山古墳出土の布について」講義を終えて

帝塚山大学教授 植村 和代

今回お話ししました、三世紀末築造の下池山古墳から平成八年に出土した縞織物は、古墳の時代背景から見て卑弥呼の時代に魏へ献上された布ではないかと推定されています。大型の鏡を包む布としてほぼ完璧な形で出土した、きわめて貴重な織物です。素材は、ベースが絹織物で、点々と麻の縞模様が生り込まれています。経糸は三眠蚕糸の国産絹で、細い縞は恐らく大麻が用いられたとみられます。緯糸はすべて絹ですが、古代



中国では見られない撚りが掛かっていることから日本産ではないかと推定されます。糸密度は、最高七十四本/cmと非常に密度高く、整然と並んで格調の高さを伝えてくれています。それでいて、細縞を多く入れた配置も見事で、研ぎ澄まされた美意識を感じます。

ところで、これまで弥生時代の絹織物は北九州の出土のみで、この絹織物が畿内で見初めものとなります。出土織物を今、完璧には復元するのは不可能ですが、この織技術は漢、魏の楽浪郡・帯方郡からの新たな伝来ではないかと考えています。また、この古墳の直ぐ近くに、卑弥呼の墓といわれる箸墓古墳があります。三世紀末の古墳時代には部族間連合が発展してやがて新生倭国の誕生につながりますが、出土品はその頃の、国づくりの始まりの技術や文化の水準を映し出しています。出土の献上縞布は「班布」の

可能性が高く、また、縞織物は多色を用いることから、卑弥呼が二四三年に献上した「倭錦」やその後垂与が献上した「異文雑錦」の可能性も残しています。

今回の縞織物の再現作業を

次回講座（六月二十五日）「きもの健康学」

奈良女子大大学院教授 高橋 裕子

京都大学の医学部を卒業して、消化器内科および糖尿病の専門医として病院に勤務、現在は京都大学付属病院や国立京都医療センターで医師として外来を担当するかたわら、二〇〇二年から奈良女子大大学院教授、二〇〇三年から奈良女子大大学院教授として研究や教育に従事しています。

現役の医者時代の筆者にとっては、きものは遠い存在でした。そんな私がなぜ着物なの？と思われることでしょう。祖母はきもの姿で日常生活を過ごしていましたし、母は着物を着るのも作るのも好きで、私も大学に入るまでは冬は自宅では着物で過ごしていました。さすがに、医学部

通じて、様々な疑問にも直面しましたが、同時に壮大な国づくりのドラマを再現する興奮に浸りました。きものや織物が持つ歴史性や文化性に触れる研究は学者冥利に尽きるものでした。

京都大学の医学部を卒業して、消化器内科および糖尿病の専門医として病院に勤務、現在は京都大学付属病院や国立京都医療センターで医師として外来を担当するかたわら、二〇〇二年から奈良女子大大学院教授、二〇〇三年から奈良女子大大学院教授として研究や教育に従事しています。

そんな私に「こんどの着物はあなたにと思ってあつらえたのよ、見に来て」と母が電話してきます。二十四時間三六五日オンタイムの仕事です。袖を通す時間はおろか着物を見に行く時間すらありません。「ごめん、見に行けない」と答える日々でした。

二〇〇二年、奈良女子大学の教官に着任し、大人になってはじめて「夜中に呼び出される懸念なく寝られる生活」を経験して「これなら着物が着られる」と思いました。それから以後は暮らしのベースは着物で過ごしています。着物姿で過ごしていても

平成四年一月号に掲載がある。このほかに和裁師の名前も浮かんでくるが、客観的な事実の説明がつかないものもある。かねてから名古屋帯の名称由来を確かめたいと思っていたので、昭和女子大学秘書室の日比野美和子氏、名古屋織物卸商業組合の益池育生氏からの資料提供をもとに、私なりの結論をここにまとめることができたように思う。心からの謝意を両氏に表したい。

名古屋帯物語 ③

京都伝統染織学芸舎主宰 日本きもの学会常任理事

富山弘基

七、名古屋帯に関連する諸説

名古屋帯が量産される昭和初頭には「ナゴヤ帯」「那古野帯（名古屋の古称）」などの珍名称が見られたようだが、当時市内で屈指の呉服商だった松坂屋・十一屋（現丸栄）・滝定・丸文・めん儀・柏信・武田呉服店らもこぞって各帯地産地製の名古屋帯を販売するようになった。

春子氏の名古屋帯は脚光を



浴びたが、幾つかの異説も紹介しておく。

(一) 大正の同時期中区栄の松坂屋では考案部に勤務する後藤小七氏の考案帯を「文化帯」と名付けて販売したが、安っぽい印象で初めは売れなかった。関西地方で名古屋帯として売り出すと「全国津々浦々まで名古屋帯でなければならぬ時代になってきた」昭和九年発行『松坂屋社内報』。

(二) 高島屋の『百選会百回

史』には「なごや帯は大正十一年羽衣（はごろも）帯の名で、手軽で経済的な新案帯として売り出された」とあります。『日本服飾小辞典』北村哲郎著・昭和六十三年、源流社刊。

しかし、この後、羽衣帯は昭和二年に名古屋帯と名称を変えている。名古屋帯の名称については呉服界共通の商品名となり、今日のように何でも商標登録で独占するほど、世知辛い時代ではなかったようである。

(三) 考案者として飯田桂子説がある。飯田女学院長の飯田桂子氏が、大正七年、当時から中区大須にあった商工館で開催の中部五県下の工芸展覧会に、独自の帯を出品して入賞した。その頃は文化帯と呼ばれたが「後に名古屋帯として広く普及、経済的で合理的な帯と評判でした」と子息飯田重忠氏の話が『広報なごや』

とも感じることは「着物は楽でからだに良い」ということです。これは、日常に着物で過ごしている皆さん（着物常用户と呼びましょう）が実感しておられることです。着物と健康に関する研究も「帯や紐が圧迫する」などマイナスイ面の研究はあっても、着物が健康面に及ぼすプラス面の研究はなかったように思えます。「無いなら自分で作る」というのが私の人生訓です。

というのが私の人生訓です。で、研究してみました。着物常用户のみなさんは「きものは暖かい」といいます。検証してみると、着物を着ていると気温にして五度分くらい暖かく感じるということがわかりました。五度分というところ、真冬でも体表面は「春先の陽気」ということです。体も楽で、余分の光熱費も不要です。着物は寒さから体を守る先人たちの知恵の結晶であり、見事なエコといえるでしょう。

「健康」と「環境」。これは二十一世紀のキーワードです。健康に良くて、環境にやさしい着物は未来着です。そんなきもの効用をお話ししたいと思います。

和やかな空気が教室を包んで

西田千賀子さん

「きもの文化塾」の魅力は、なんととっても、講師の先生と膝を突き合わせる距離でお話しが聞けることです。講座の内容がぐっと身近に迫ってきて、理解しやすい。それに、受講する人も年齢構成をはじめばらばらですが、それぞれがきものやきものにまつわる文化への興味を持っていて、共通していることで話しているの、教室を流れる空気がとても和やか。寺子屋形式という講義コンセプトも仰々しくなくて気持ちのいい時間を過ごさせていただいています。月一回、同じ時刻に同じ場所での開催形式も予定が立てられやすくて助かります。

次回講座
七月三十日／「加賀友禪の美学」
加賀友禪「由水十久」語り部・能登一彦氏

仕事の参考に
なって、興味倍
増です

上田瑠璃子さん
桂川染匠社長

二回目は用事があって参加できず、残念でした。第一回目「女紋」の話は、身近なテーマで興味深く聞きました。私自身が仕事で同じ内容でお話しする場面もありますので、余計に関心があつて勉強になりました。森本先生の講義ぶりは、私たちと同じように仕事できものに携わりながら研究を続けてこられた方だからこそわかりやすい内容でした。この塾では、業界内できもの仕事に従事しているプロの方が多く参加されているのだから、通り一遍の内容ではなく、へえ、と思わず膝を打つような話をたくさん聞きたいものです。今後の発展に大いに期待しています。